

本稿では、2025 年度イラン研修について、自分なりの視点から報告を試みる。私の専門は思想研究であり、多くの参加者とは専門を異にする。それゆえ、イランをめぐる国際関係や、経済の現況を仔細に検討することはせず、他の参加者に筆を譲る。この報告の主眼は、人文学を専攻する者として、イランの学生と交流し、あるいはイランの街を見て回るなかで疑問や考察をまとめることにある。もとより、例えばイスファハーンの美しさやテヘランの雑踏を言葉で「報告」することは不可能だ。それよりは、自分の目と耳で受け止め、考えさせられたことを述べてみたい。また、プログラムの詳細は笹川平和財団のHPを参照していただき、スケジュールに沿った回顧録ではなく、テーマごとに雑感を述べるという形をとる。

ひとつだけキーワードをあげるなら、「会話」になる。個々のプログラムの間に交わされた、特に SIR の学生との会話が、さまざまなことを考えるきっかけになった。以下では、会話から浮かんできたことがらを素描しておく。雑多で生煮の内容になるが、ご容赦いただきたい。

（なお、本研修では、主催である笹川平和財団の支援と、SIR(School of International Relations)や、日本大使館、イラン外務省などから暖かい歓待を受けました。この場を借りて感謝申し上げます。）

詩をめぐる——文化と生活

まず驚いたのは、イラン社会と、ペルシアの伝統的な文化との距離間だ。特に、詩を中心とするペルシア語の文学が、街のそこかしこに息づいていることは印象的だった。

例えばショッピングモールで売られているようなものには、ペルシア文字の装飾が施してある。こうした装飾は、大体は何らかの詩文を参照しているらしい。日本語の書道 T シャツ（とでも呼べばいいのか）や、アルファベットの印字されたバッグなどを見ると、ほほえむほかに反応しようのない語が示されていたりする（かの有名な「極度乾燥しなさい」など）。だが、ペルシア文字ではそうはいかない。T シャツを SIR の学生に見せると、「ああ、これはハイヤームだね」とか、「これはハーフェズだね」（ハイヤームやハーフェズはイランの詩人）とか、即座に答えが帰って来る。その彼いわく、ペルシアでは日常の中で詩を引用することもあるらしく、皆ハイヤームの『ルバイヤート』や、『シャーナーメ』といった有名な作品になじんでいるとのことだった。

私にとって、これは驚愕すべき出来事だった。例えば日本で、『源氏物語』や『平家物語』の一節を自在に誦んじることのできる人が、果たして何人いるだろう。古文ではないにしても、例えば谷川俊太郎でも、宮沢賢治でもいいけれど、果たして彼らの詩文は、何人の日本語話者に受け継がれているだろうか。少なくとも、普通の日常会話では出てこないし、まして T シャツに印字されるケースは稀だと思う。だがペルシアの詩人たちの残した文字は、いまだイランの人々に受け入れられ、反復され、生活の中で活きている。

他の例を出そう。上述のハイヤーム『ルバイヤート』は、日本語訳が複数あり、私は岩波文庫版を持ち込んでいた。ただ、イランに行くといっても、21 世紀の現代イランだ。日本語話者が（私を含め）紫式部などろくに読まないように、『ルバイヤート』もまた、教科書だけの存在だろうと思っていた。

けれど、SIR の学生との会話のなかで、ハイヤームや『ルバイヤート』という言葉は、いくらかでも聞くことがあった。文学に興味があるという、現代の作家よりもまず先に、ハイヤームという名前が出る。あるいは、政治思想を専攻していたある学生と話していたら、好きな哲学者として、イブン・シーナー（ペルシア出身の哲学者）の名がまっさきに上がる。これはすごく興味深かった。

もちろんその背景には、国家として、古代以来のペルシアの文人たちを顕揚しているということはあるだろう。観光地であるミラド・タワーには、古今の偉人たちの像が列挙されていて、さながら偉人列伝のようだった。ホテルのロビーにさえ、ハイヤームなどの胸像が飾られていたりした。イラン革命の遙か昔に活躍した文人たちが、現代国家のナラティブに回収されているのでは——という疑問もないではない。しかし、ペルシアという文明が数千年の時を刻んできたこと、そしてその文化が度重なる政変を越えて現代でも受け継がれていることには、単に国家のナラティブということで済ませていいとも思われなかった。

イランの社会には、文化や文学が息づいているように感じられた。数千年の時を刻むペルシアの知的伝統が、美しいペルシア文字の紋様と化して、街の風景や、たわいもない会話から見て取れたのである。

国家をめぐる——国民国家との距離

他方、イランの街、特にテヘランを歩く中で避けて通れないのは、種々のナショナリスティックなシンボルだった（イスファハーンやカーシャーンではそれほどでもなかった）。街の中には国旗が立ち並び、時にはひときわ大きな国旗がたなびいている。あるいはモスクなどの観光地でさえ、たいていホメイニ師の肖像が飾られている。だから滞在中は、「私は今イランという国家にいるのだ」ということを強烈に意識することになった。

総じて、イランの学生は、国家というものへの距離感が近いように感じた。それは例えば、彼らから発される問いかけにも端的に表れていた。ディスカッションの時間では、「イランと日本の二国家間関係の今後」や、「日本の中東政治における役割」など、国家の視点からの問いが多く発された。彼ら彼女らの専門が国際関係論であることもその一因ではあるだろう。ただそれでも、国家というものが普通に話題に上がって来る点から、日本社会の学生の国家観とは違うものを感じた。例えば、ペルシア系とは異なる民族系統に属する学生もまた、イラン国民としてのアイデンティティを率直に口にしていた。ナショナリティが唯一のアイデンティティでは当然ありえないにせよ、国家という水準は、この国ではより内面にもかかわっているのではないかと、思われた。

近代以降のナショナリズムが、程度の差はあれ、ある地点までは社会的に構築されたものであり、その限りで近代国家とは「想像の共同体」（アンダーソン）であるという理論は良く知られている。そして国家の文化というものが、幾分かは国家によるトップ・ダウンで形づくられるという発想もまた、こと人文学の領域では、常識に属する発想ではある。わずかながら人文学のトレーニングを受けた人間として、イラン滞在中は、これらの理路の意義を再考することを迫られた。私の出会ったイランの人々は、むしろ国家と上手く付き合っているようにも見えた。だとすれば、ナショナリズムの虚構性に眉を顰める...というのは単純に過ぎる。とはいえ、例えばイラン革命以降の歴史を伝える聖戦博物館で、イラン＝イラク戦争のあらゆる側面が「イラン VS イラク」という国家のナラティブに基づいて語られることに、違和感がなかったと言える嘘になる。戦争で傷を受けるのは、国家よりもまず市井の人々ではないのか。戦争の現実が、国家の枠組みに落とし込まれてはいないか——という疑問もまた頭をもたげた。

イランの街を歩き、あるいはイランの人々と話す中で、個人と国家との距離の取り方について、反省を迫られた。拙速に結論を出すことはまだできないが、今後付き合うことになるだろう問いが一つ増えた。

戦争をめぐる——言説と立場

いわゆる 10.7 以降、ガザでの惨事が続いている。この話題も繰り返し登場した。もとより、イランのパレスチナとの関係は、日本のそれよりも深い。そしてまた、日本が避けがたくアメリカ－イスラエルとの関係を取り持っている一方で、イランは明らかにパレスチナの側に立っている。その限りで、ガザを中心とするパレスチナの話が出るのは必然だった。

想像していたことではあるが、イランの人々（そしてアルジャジーラの研究員の方々）のスタンスは、明確に反

米、反イスラエルだった。例えばアルジャジーラの立場ある方が、アメリカやイスラエルのふるまいをこそが「テロリズム」ではないかとはっきり指弾していた。もちろん、アメリカやイスラエルを糾弾し、パレスチナの側に立つ言説は、奇異なものでは全くない。日本でも、少なくともアカデミズムや左派的な思潮の枠内では自明のことがらでさえある。それでも、日本の文脈では、そうした態度がメイン・ストリームのメディアに見られることは稀だ。だがイランでは、そしてアルジャジーラでも、反米・親パレスチナは、逆に当然の理として語られている。

個人的な政治的立場を述べれば、パレスチナの問題については、少なくとも第二次世界大戦以降の世界史的な趨勢において受け止める必要があり、その限りでイスラエルの歴史上のふるまいに深刻な問題があると考えている。とはいえ、ここでは主張の妥当性ではなく、親パレスチナという態度がメイン・ストリームであることの方が重要だと思う。というのは、少なからぬ人々が、西欧でも日本でもパレスチナの側に立っている。にもかかわらず、親パレスチナの言説は主流になっていないように見える。イランではこれが逆転する。明らかに、現代世界へのかかわり方が、アメリカの影響下にある世界（そこには当然日本も含まれる）とは異なるのだと感じた。

会話をめぐって——研修の余白に

イランの学生との会話のなかで、上に述べたような種々の発見をすることができた。とはいえ、彼ら彼女らとの会話は、一筋縄ではいかなかった。非英語ネイティブどうしの対話である上に、知的・文化的背景が全く異なるからだ。特に、国際関係論についてまるで疎い私には、彼らとの共通了解さえなく、ぎこちない会話の連続だった。自分の不勉強のせいもあって、上手く理解できなかったこと、納得なかったことも多く残った。イランについて多くを知ったというよりも、いかにイランの——そしてイランをめぐる世界の——ことを知らないかという、自分の見識の乏しさを自覚させられる日々だった。

だからこそ、今回の経験を起点にして、より多くイランのことを知りたいと思う。私のイランについてのイメージは、まだまだ乏しい。これ以後、勉強や交流を重ねて、イランについてのイメージを、もっと多様に、多彩にしていこうと思う——自分のなかでも、そして自分の周りでも。